今年も一一・九に記念集会

加・高守る会が

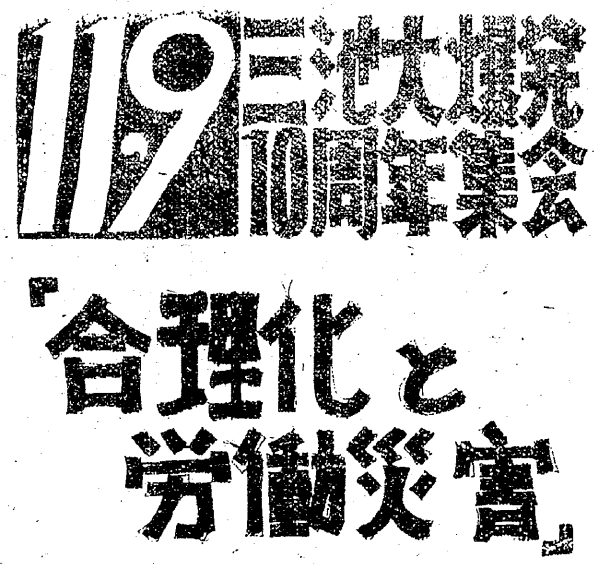
▼…このほど〝加古川・高砂CO患者を守る会〟の責任者＝菅野逸雄さん（兵庫県加古川市尾上町今福六〇八）から、便りがあった。

便りによれば三川鉱大爆発十年目の、きたる九日〝一一・九三池大爆発十周年集会〟を開催するとのこと。集会にはとくに〝神戸CO守る会〟会長の清田移さんを招いて、「合理化と労働災害」という主題の話を聞く計画と。

▼…〝加古川・高砂地区CO患者を守る会〟は、いま会員数三十人。

同会はこれまでも一一・九三池大災害の記念日がやってくるごとに、遠く三池に思いをはせながら、必ず集会を持ち、当地での反合理化・生命を守る闘いの強化に努力をはらってきた。

▼…日常活動が、地道に続けられている点も見のがせない。月二回の学習会。月一回幹事会の定例化。公害反対闘争アピールのビラはり。選挙や反戦平和の闘争。とくに〝青野ケ原ホーク基地設置に反対する青年会議〟には、組織参加。ハイキングなどして内部の結束も忘れてはいず、頭がさがる。左は集会よびかけのポスター。



身内も寒くなる思い

物価高、重税、軍国主義の台頭
九州ブロック会議に参加して……

主婦会事務長局　島　フミエ

総評主婦の会では、「七三秋季九州ブロック活動者会議」を去る二十三・四日佐賀市で開催。子供のしあわせのためにも、ほんとうに学習し、闘う主婦会運動にまで強めることを決意しました。

九州各県から約百七十名の人たちが集まり、「暮らし」「主婦と労働」「教育」「平和」「組織」の各分科会にわかれて討論を深めました。

私は「教育」の分科会に入りました。特徴的な意見を拾って見ますと、

――義務教育は、本来無料であるはずなのに、父母負担があまりにも多過ぎる。運動会には祝儀金の名目で寄付をつのり、中学校では進路対策費や補習費の謝礼など、納得がいかない出費がある。

――（小学校生徒のお母さんから）教科書がむつかしくなっている。子供たちはテストばかりで、ほんとに可哀そうだ。もう少し伸び伸びと、勉強させてやりたい。

――（高校生徒のお母さんから）大学の予備校化した高校では子供が勉強勉強と追いまくられ、親子の対話もなくなっている。教師も、「火事があっても、消しにゆくより勉強せよ」と、教える。人間性を失ってゆくのではないかが、心配でたまらない。

助言者の伊藤先生（佐賀県教組書記長）は、次のように発言されました。

「義務教育費父母負担軽減運動を、教組としても取り組んできたが、父母の皆さんといっしょにやることが大切だ。

教育の内容も、戦前の教育は習う義務があったが、戦後のそれは教育を受ける権利があり、子供中心の教育が行なわれていたが、二十七年の朝鮮戦争以後アジアの安保体制が叫ばれるようになったころから、教育委員は任命制になり財界の要望に添って、教科書は統制の方向をたどり、同時に内容もむつかしくなってきた。

そのうえ学習指導要領でしめつけられるので、結局はできる子供にだけ教えていく結果となっている。能力主義に差別教育となった。

どうか教育問題はあきらめないで、高校全員入学や学区制拡大反対などの運動をともに強化していただくようお願いしたい」

翌二十四日は、「政治の流れを変える主婦の役割」として、総評オルグの前田九州事務所長の話がありましたが、前日の分科会と合わせ、改めて物価高、重税、軍国主義などの問題について認識を新たにし、身内が急に寒くなる思いを覚えました。

子供にはげまされ

本所支部　平川弘子

つい、先日の夕食のことです。テレビのチャンネルが思うように調整できずにいるのに、ニュースを視ることができて満足している父親は、中近東の戦争状況を視ながら、鴨居に頭がつきそうに成長した中学一年の長男に、問いかけました。

「どうか。お前は姉ちゃんとちがって、あんまりものをいわんけん、よう判らんばってん、戦争についてはどう思うとっかい」

「……なしいわんなんね」

「なして。もう中学生にもなったつじゃけん、少しは世の中の動きを知って、自分はどう思う、ということは持ってもよかと思うがネ」

「そんなら、お父さんが僕ぐらいのときはどげじゃったつ」

少しまずいことになったな…と思いながら、私は聞いていました。

「お父さんが子供の時代は、のんびりしとったごたる。いまのお前たちは精神的に成長しとるごたるし、時代の流れで社会のできごとも、よう知って判断しているとじゃなかか、と思うとるとたい」

なかなか返事が返ってこないので、私が一言。

「カツコのよか戦争マンガやS・Fみたいな空想絵ばかり書きよるけん、戦争賛成の部類じゃろと思うョ」

ところが――

「お父さんたちは、そんか子供に育ててきたつね」

「ウーン。そうか。それを聞いて安心した。お父さんたちは自信を持ってよかたいネ」

そのときの子供の言葉に、私たち両親に対する、運動への理解の片りんと、はげましの意味さえあることと受けとめ、心暖まる思いでした。子供の言葉にはげまされながら、運動の正しさを自信を持って行動に移そうと決意しているところです。

本当に、私たち労働者とその家族が、戦争を知らない若者たちに真実を知らせ、伝え、平和への運動を、生産点での反合理化闘争と結合させて進めなければ、と思います。

×

この〝姿見〟欄に、福祉五分会の「I・K」さん（筆名）からもいただいております。次号に掲載させていただきます。大変ありがとうございました。

爆発

一九六三年十一月九日

宮浦指導部　前田義則

短歌

爆発の坑道（しき）に乱るるアーチ枠の盤支えぎる鉄柱無惨
COガス吹き払い仲間探りゆく坑壁の窪にただよう屍臭
坑道に転がりともる帽灯にちかずけばふたつ二人の死体
帽灯はともりてにぶく息絶えし無念の坑夫かたみに照らす
へがんばったが　もうだめ〉切れしコンベヤーにすがり書きつつくずおれし死か
コミュニスト吉田大三親しみたる反歯に炭塵（すみ）をかみいて死せり
炭塵は層なして切羽に吹きつもり顔失いし坑夫掘りだす
ガス充てる坑道はいずりて破れたる指の骨しろし遠り得ざりし
風戸（ふうど）引く力さえなく声の隙の乏しき酸素吸い果てし顔
道床は流されてかたき下盤踏む背に負う遺体しずくしやまぬ
三十五昇わたるはしごに宙ずりの遺体を降ろす縄にからめて
切羽より運びしが誰かわからざる腸はビニールの袋に詰むる
黄泉（よみ）の図にあらず帽灯に照らしゆく遺体はすでに百を数え
排気道に逃れてあらき呼吸をつく坑夫はすでに狂いたりき
救出のおくれを責むる声かれて夜の坑口に老合掌す
坑口より出でくる担送の灯のなかの毛布かむれるは死者か生者か
押しわけて坑口離れゆく担架誰からとなく死者の名をいう
地下足袋の底よりせまる霜の夜の寒さをいえり坑出でしのち
死者を洗う部屋の廊下にかさね置く作業衣は坑夫の血と汗匂う
妻の眼に見分かちがたき亡骸となりはてにけり腸ひとつ
死者確認すでに百人をこえたりと社宅におもし坑内のさま
殺されし坑夫誰彼名をあげて抗議の主婦は涙ぬぐわぬ
ビラ渡すわれをわが党を励まして焼酎強いる負傷坑夫は
炭鉱に恨みのこして社宅より去りゆく遺族老い母ひとり
抗議せむ示威隊形は整え怒りの弔旗先頭にたつ
八生命かえせ〉固き拳をつきあげる坑夫の胸のくやしき遺影
四百五十八人の遺影連ねたるを壮絶などといえり傍観者は
労組をそしるはわれら坑夫ゆえに生命を金にかえよというか
闘いて生命守らむ旗をつらね坑夫三千が踏む霜柱
坑夫らのたたかいに党旗つねありき焔のごとくひるがえるいま
（作者は、いま歌集の出版をすすめています）

松原を住民の手に

岡垣射爆場に反対する

岡垣町　藪内直二

三池労組の皆様、毎日大変ご苦労さんです。保安無視で人が殺されてゆき、私も心がいたんでいます。団結を強めて闘って下さい。心よりお祈り致します。

私も三池を離れて早くも九年になりました。三池の労働運動できたえられたおかげで、いまは県職労の一人として頑張っています。

ところで岡垣射爆場は、国定公園の一部の、風光明媚の三里松原であったのを、二十三年に米軍に強制接収されたところです。

これまで誤射・誤爆のため三人の生命が奪われたのが、日米安保条約のため知らぬふりだったようすです。

町議会で、全員一致で決議した撤去決議が、半年もせぬうちに使用同意にかわったりしています。

そこでわれわれ反対する者が〝撤去を進める会〟を結成、自治体に対する働きかけを強めてきました。

議会民主化をさけびながら議長交渉、全議員交渉など続けた結果議長は「議員の考え方を聞いたもので、同意ではない」ことを確認しました。が町長は、病院よりひそかに同意を防衛庁に送っていたのでした。

これを聞いて、町民は「おかしい」といって、〝射爆場から子供を守る母親の会〟や〝自然を守る会〟を結成しました。

ついに町長が辞表を提出するまで追いこみ、保守と革新対決の町長選挙となりました。「基地をなくし、住民の憩いの場所に」と革新。「町財政が苦しいので、基地は必要だ」という保守。

われわれの革新が破れましたが、そのため基地反対の闘いはますます広がって行き、ついには中央行動へと発展し、国会や二階堂官房長官や中山防衛庁長官など、また地元国会議員への陳情を積み重ねたのでした。私も参加しましたが、自民党は口先ばかりで、住民のことはなんにもしてくれないことがはっきりわかりました。

八月一日使用告示。われわれは役場前で座りこみ、住民にうったえました。飛行機がやってきたときには、基地の着弾地まで行き、爆撃訓練を阻止しました。海よりタコをあげて、阻止したこどもあります。いろんな戦術を取りながら、抵抗しました。

九月十六日県民大集会。一万人結集。これで、基地周辺の人たちが力をつけてきました。

とにかく美しい三里松原が住民の手にかえるまで、闘っていきますので、組合員皆様のご支援をお願いします。

×

写真は、射爆場反対の座りこみ。この中に、腕章をした筆者の姿がある。